

在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」と その背景に関する一考察

尹 成 秀

在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」と その背景に関する一考察

尹 成 秀

目 次

- はじめに
- I. 在日コリアンについて
1. 在日コリアンの定義
 2. 在日コリアンの人口数
- II. 在日コリアン青年について
1. 今日の在日コリアン青年の人口数
 2. 今日の在日コリアン青年の世代
 3. 今日の在日コリアンの境遇
 - 3.1 名前と母国語
 - 3.2 民族教育について
 - 3.3 社会生活について
 - 3.4 まとめ
- III. 在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」
1. 在日コリアン青年の民族的アイデンティティに関する先行研究
 2. 在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」
 - 2.1 「差異をめぐる葛藤」の定義
 - 2.2 同年代の対人関係における「差異をめぐる葛藤」
 - 2.3 親子関係における「差異をめぐる葛藤」
 - 2.4 心理臨床的支援における「差異をめぐる葛藤」
 - 2.5 まとめ
- IV. 在日コリアン青年にとって「差異」が問題となる背景
1. 「隠れたマイノリティ」としての在日コリ

アン青年

2. 日本文化における対人コミュニケーションの特徴と「差異」をめぐる「恥」の情緒
3. 今後の課題

要 約

本稿では、在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」について、在日コリアン青年にとってなぜ「差異」が問題となるのか、その背景について考察を試みた。はじめに、本稿における在日コリアンについて定義し、今日の在日コリアン青年の、人口数、世代、名前と母国語、民族教育、社会生活について整理した。次に、在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」の概念を整理して論じた。最後に、在日コリアン青年にとってなぜ「差異」が問題となるのかを、今日の在日コリアン青年の境遇と日本文化におけるコミュニケーションと「差異」をめぐる「恥」の情緒の観点から考察を行った。

キーワード：在日コリアン、在日コリアン青年、対人関係、差異をめぐる葛藤、恥

はじめに

在日コリアン青年については、特に1980年代の終わりから社会学の分野において研究が積み重ねられてきた。その背景には、エスニシ

*臨床心理学研究科 博士課程（後期）

ティの問題が社会学分野で注目され始めたことや、特に若年層を中心に民族団体離れが進行し、在日コリアンコミュニティ内でも青少年層を対象に社会調査によって実証的かつ客観的に実情を把握しようとする機運が高揚したことなどの理由があげられる（福岡・金，1997）。以来、特に在日コリアン青年の民族的アイデンティティの様相、そして彼らを取り巻く社会問題について知見が積み重ねられており（例えば、福岡，1993；福岡・辻山，1988；1989，狩谷，2000），教育（例えば、梁，2010；曹，2013）や心理学の分野（例えば、中村・慎・平・川本・横山・高田，1994；平・川本・慎・中村・1995）においても研究が行われてきた。

近年の心理学分野における研究として、在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験について検討を行った研究（尹，2016a）がある。その中では、彼らが対人関係の中で、相手との間で、出自、祖国や母文化に対する思いなどの差異に直面した時、「差異をめぐる葛藤」が生じ、この体験が彼らに対人関係の困難をもたらす中核的な問題の一つであることが示唆されている（尹，2016a）。また、「差異をめぐる葛藤」について理解しておくことは、在日コリアン青年の心理臨床的支援を検討する際にも重要であることが指摘されている（尹，2021a）。

本稿では、一体なぜ、在日コリアン青年の対人関係において出自、祖国や母文化に対する思いなど、在日コリアンであることにまつわる「差異」が問題となるのかについて考察を試みる。そのために、まず今日の在日コリアン青年について整理する。次に、「差異をめぐる葛藤」の概念についてまとめる。そして、彼らの境遇と日本文化におけるコミュニケーションと「差異」をめぐる「恥」の情緒の観点から、「差異をめぐる葛藤」について考察を行う。

1. 在日コリアンについて

1. 在日コリアンの定義

本稿では在日コリアンを、谷（1995）の定義

を参考に、「戦前、戦中の日本の植民地支配のもとで朝鮮から日本へ来た者とその子孫であり、韓国・朝鮮籍を持っているか、その他の国籍であっても自身のルーツが朝鮮半島にあることを認識し、日本に定住している人々」と定義する。いわゆるオールドカマーと呼ばれる者あるいはその子孫が、本研究の定義する在日コリアンに該当する。したがって、近年、ビジネスや留学等を目的に韓国から渡日してきた者（いわゆるニューカマー）は含まれない。また、その他の国籍であっても自身のルーツが朝鮮半島にあることを認識している者を含む理由は、井出（2000）が指摘するように、日本国籍の取得や国際結婚の増加によって、日本国籍の者や韓国・朝鮮籍と日本国籍を合わせ持つ者などが増加しているためである。

2. 在日コリアンの人口数

在留外国人統計（法務省、各年版）によれば、1980年代中頃までは、日本における在留外国人の大半は「韓国・朝鮮」籍であり、例えば、1985年には当時の在留外国人総人口850,612人のうち、約8割に相当する683,313人が「韓国・朝鮮」籍であった。しかし、1980年代後半から、「中国」籍をはじめ、その他の国の在留外国人が著しい増加を見せる一方で、「韓国・朝鮮」籍は1990年代からゆるやかに減少している。2019年においては、在留外国人総人口約2,933,137人のうち、「韓国・朝鮮」籍^{注1)}は474,460人（うち、韓国籍446,364人、朝鮮籍28,096人）であり、817,365人の「中国」籍に次いで2番目に多いグループではあるものの、「韓国・朝鮮」籍の者は着実に減少していると言えるだろう。一方、ここで注意したいのは、「韓国・朝鮮」籍には、先に述べた本稿の在日コリアンの定義には含まれないニューカマーの韓国人の数が含まれている点である。そこで、「特別永住者」の在留資格を有する者に着目する。「特別永住者」とは、1991年に施行された「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」によ

り定められた在留資格である。「特別永住者」は、「韓国・朝鮮」籍の者以外に、「台湾」籍の者なども有する資格であるが、そのほとんどはオールドカマーの「韓国・朝鮮」籍の者である。2019年では、「特別永住者」312,501人のうち、「韓国」の「特別永住者」が281,266人、「朝鮮」の「特別永住者」が27,543人であり、合わせて、「韓国・朝鮮の特別永住者」は308,809人となっている。すなわち、「特別永住者」の資格を持つ者のうち9割以上が「韓国・朝鮮」籍のオールドカマーの者とみなせるであろう。「韓国・朝鮮籍の特別永住者」の人口数も「韓国・朝鮮」籍と同様に減少に傾向にあり、2000年の時点では507,429人であったのに対して、2019年には先に述べたとおり308,809人と減少している。このことは、在留外国人人口における「韓国・朝鮮」籍の減少は、「韓国・朝鮮籍の特別永住者」の減少と考えられるであろう。この減少の背景には、在日一世をはじめとする高齢者の逝去、日本国籍取得者や日本人との国際結婚の増大が指摘されている（金、2007；水野・文、2015）。

なお、本稿で定義する在日コリアンの人口数は、「韓国・朝鮮籍の特別永住者」308,809人に加えて、日本国籍を取得した者、国際結婚によって生まれながらに日本国籍である者、朝鮮・韓国籍と日本国籍を合わせ持つ者のうち、自身のルーツが朝鮮半島にあることを認識している者を含めた数である。しかし、その者の数を正確に把握することは不可能であることについて留意しておく必要がある。

ここまで本稿の定義する在日コリアンの人口数を見ていくにあたって、「国籍」、「在留資格」といった複数の指標を参照した。今日、日本に定住する他の在日外国人グループの実態を論じる上では、「国籍」が主要な指標となるのに対して、在日コリアンの実態を論じる上では一つの指標のみで単純に捉えることが難しく、曖昧な部分を含まざるを得ない。

Ⅱ. 在日コリアン青年について

1. 今日の在日コリアン青年の人口数

「青年」の年齢の始まりと終わりをいかに定めるのかについては、様々な意見や立場がある（池田、2015a, 2015b；都筑、2013）。例えば、青年期の始まりと終わりについて、大学生を対象に行った調査（都筑、2013）では、始まりについては、15歳、18歳、20歳の回答が多く、特に18歳とする回答が最も多い。一方、終わりについては、20歳、22歳、25歳、30歳の回答が多い。30歳以上の成人を対象に行った調査（池田、2015a）では、始まりについては大学生の回答と同様に15・16歳、18歳、20歳の回答が多いものの、終わりについては22歳、24・25歳、29・30歳、35歳、39歳の回答が多く、30代後半までが含まれる。研究者を対象に行った調査（池田、2015b）では、青年期の終了年齢について、22歳、25歳、30歳の回答が多かった。以上を踏まえ、本稿では、18歳～30歳までの者を青年とみなす。

今日の在日コリアン青年の人口数を考える手がかりとして、まず、2019年における日本に在留する韓国・朝鮮籍のうち、18歳～30歳の人口数は韓国籍が66,510人、朝鮮籍が2,053人であり、計68,563人である。ただし、この数字には留学や前述のニューカマーも含まれる。そのため、「特別永住者」の在留資格を有する18歳～30歳の人口数を参照すると、27,351人である。「特別永住者」の在留資格を有する者の9割以上が在日コリアンであることから、この数字が18歳～30歳の「韓国・朝鮮籍の特別永住者」の数を表しているとみなしてよいだろう。ここに、さらに日本国籍の在日コリアン青年などの数を加えたものが、本稿における今日の在日コリアン青年の人口数となる。日本国籍を有する者や日本国籍と韓国籍もしくは朝鮮籍を合わせ持つ者が増加しているとの指摘（井出、2000；谷、1995）があるものの、その数を知る術はなく、本研究の在日コリアンの人口数と同

様に、今日の在日コリアン青年の正確な数を把握することは不可能である。ただし、国籍と在留資格に着目した人口数からは、少なくとも、今日の在日コリアン青年の人口数は、27,351人以上であり、その多くは韓国籍もしくは日本国籍の者で、朝鮮籍の者はおよそ1割程度ないし1割未満であると言えるだろう。

2. 今日の在日コリアン青年の世代

在日コリアンにおいては、祖国生まれの一世、その子である二世から、三世、四世、そしてそれ以降へと世代的な移行が進んでいる。三世以降の者は、日本で生まれ育った親のもとに生まれた子である。2019年における在日コリアン人口の各世代の割合に関する資料は見当たらないものの、姜・金(1994)が、当時の在日コリアンの出生地に関する統計資料を根拠に「1974年には「日本生」が75.6%に達した」と記述し、水野・文(2015)も、「1960年代末には、二世が全体の70%を超え」と記述している。また、福岡・金(1997)における「1993年在日韓国人青年意識調査」では、18歳～30歳の在日コリアン青年800名に実施され、調査協力者の主な世代は三世となっている。これらを踏まえると、今日の在日コリアン青年は、主に三世・四世以降の者であると考えてよいであろう。

3. 今日の在日コリアンの境遇

今日の在日コリアン青年の境遇を考える上で、福岡・金(1997)の実施した「1993年在日韓国人青年意識調査」と、金原・石田・小沢・梶村・田中・三橋(1986)が1983年に実施した「神奈川県内在住外国人実態調査」は貴重な資料としてあげられる。それぞれの調査における母集団の設定は、福岡・金(1997)の意識調査では、「日本生まれで、韓国籍で、18歳から30歳の者」であり(調査協力者800名)、金原他の実態調査では、「神奈川県に在住する韓国・朝鮮人および中国人で1984年9月1日現在で満20歳以上の男女」である(調査協力者1028名、うち、韓国・朝鮮籍が866名)。ここ

では、2つの調査の結果と、その他の論文の知見も踏まえながら今日の在日コリアン青年の境遇について記述する。

3.1 名前と母国語

在日コリアンは、その歴史的な背景から、多くの者が民族名のみならず日本名を有している。また、国際結婚により、民族名と日本名を合わせ持つ場合もある(「民族名」は「本名」と、「日本名」は「通名」とも言われるが、本稿では、引用以外では「民族名」、「日本名」と表記する)。民族名日常生活で用いる氏名については、民族名と日本名の使用度について、福岡・金(1997)の調査では、「まったく通名だけ」と「ほとんど通名だけ」が合わせて6割を超え、「まったく本名だけ」と「ほとんど本名」が合わせて1割強となっている。そして、「同じくらいに使い分けている」、「通名の方が本名よりも多い」、「本名の方が通名よりも多い」と日常的に民族名と日本名の両方を使用している者が、合わせて2割程度となっている。金原他(1986)の調査においても、「通名のみ使用」と「通名多く使用」が合わせて7割であり、「本名のみ使用」と「本名多く使用」が合わせて1割強、「本名・通名両方使い分け」が1割5分強となっている。なお、金原他の調査においては、中国籍も含まれるため解釈に注意を要する。ただし、同調査における通名の所持率は、韓国・朝鮮籍が866名中9割を超える者が通名を所持しているのに対して、中国籍で通名を所持している者は2割に満たない。そのため、これらの割合はおおむね韓国・朝鮮籍の名前の使用度として捉えることができよう。

母国語の能力については、福岡・金(1997)の調査によると、読解は、「まったく理解できない」が6割強で、「辞書を使っても少ししか理解できない」、「ハングル(文字)は読めるが、理解はできない」、「ハングル(文字)も少ししか読めない」が合わせて2割程度、「辞書なしでだいたい理解できる」と「辞書を使えばなんとか理解できる」が合わせて1割強となってい

る。会話能力は、「まったくできない」が4割、「いくつかの単語しか知らない」、「いくつかのあいさつの言葉しか知らない」が4割強、「こみいった議論ができる」と「簡単な日常会話ができる」、「その場に応じたあいさつぐらいはできる」が合わせて1割強、となっている。金原他（1986）の調査でも、「祖国の言葉」についての「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」が「できる」と自己評価した者の割合は、「聞く」のみが3割強で、ほかは2割程度となっている。

3.2 民族教育について

今日の在日コリアン青年の学校教育について、およそ7割（朴, 2009）ないし8割（姜・金, 1994）の子どもは、日本の公立の学校（以下、日本の学校）に通い、3割ないし2割の子どもは民族学校に通っていると言われている。

戦後、民族学校は、在日コリアンの民族教育の熱意によって展開された。特に、「在日本朝鮮人総联合会」（以下、総連）の朝鮮学校は、1960年には東京の小平市に設立された朝鮮大学校を頂点に、全国で371校の民族学校が設けられ、学生数も4万6,000人に達したという（水野・文, 2015）。今日の在日コリアンの民族学校は、総連系の学校（いわゆる朝鮮学校）においても、「在日本大韓民国民団」（以下、民団）系の学校（いわゆる韓国学校）においても、朝鮮籍、韓国籍などの国籍に限らず、日本国籍も含め、朝鮮半島にルーツを持つ子ども達が在学している。

マスメディアの報道によると、1970年代はじめに4万6,000人だった生徒数は、2000年代以降、急減し、2009年頃には1万人を割っており、2019年5月の時点で日本全国の朝鮮学校64校（朝鮮大学校を除く）に在籍する学生数は5,223人であるという（産経新聞, 2019；中央日報日本語版, 2019）。なお、民団系の学校においては、例えば、東京韓国学校において、2019年4月9日基準で、在学学生707名のうち、特別永住者の在留資格は72名となっている。日本の学校に通う在日コリアンの子どもでもあっ

ても、大阪府などを中心に展開される「民族学級」において、母国の言葉や文化を学ぶ子どももいる。大阪府においては、大阪府・大阪市内におよそ180校の公立の小・中学校に民族学級が設置されており、約2,500人の子どもたちが民族学級に参加しているという（コリアNGOセンター, 2021）。

3.3 社会生活について

今日の在日コリアン青年の社会生活について、宋（2001）は「一世と二世が、主に日本の中で差別に対して抵抗、あるいは適応しながら生の基盤を築くことに力を注いできたとすれば、三世と四世を中心とした若い世代は、ある程度安定した生活環境の中で日本の経済発展の恩恵を享受している」と述べ、一世や二世の生活環境と今日のコリアン青年の生活環境が大きく異なることを指摘している。実際、在日コリアンの歴史において、戦中は鉱工業や土木建築、紡績工場や町工場などで、いわゆる「3K労働（キツイ・汚い・危険）」に従事し、戦後は、就職差別や賃金差別によって、貧困が大きな問題であった（水野・文, 2015）。また、1910年の韓国併合より、在日コリアンは日本国籍を有する「帝国臣民」として扱われ、1952年のサンフランシスコ講和条約の発効に際し、在日コリアンは日本国籍を失ったことにより、公共機関で職を得ることができず、国民健康保険や国民年金をはじめとする多くの社会福祉制度でも適用外とされた（姜・金, 1994；水野・文, 2015）。しかし、1970年の日立就職差別裁判闘争をはじめ、1970年代～1980年代にかけて在日コリアンと日本人が手を取り合い、在日コリアンの人権擁護・差別撤回運動が展開された（田中, 2013）。その結果、国民年金法や国民健康保険法における国籍条約の撤廃（1982年, 1986年）、外国人登録証における指紋押印制度の撤廃（1993年）、朝鮮学校卒業生の大学受験資格（2003年）など、社会制度上の差別の多くが改善され、今日に至っているという。ただし、今日においても朝鮮学校の高校無償化

除外などの社会制度上の問題が指摘されている(田中, 2015)。

一方、日本人の人種・民族に関するステレオタイプや偏見に関する研究(中村, 1999)が示すように、日本では欧米系外国人や他のアジア系外国人と比べて、朝鮮民族に対するステレオタイプ像が非好意的で、偏見が強い傾向にある。今日においても在日コリアン青年が日常生活の中で差別感情や差別意識に直面することも少なくない。在日コリアン青年の被差別体験について、福岡・金(1997)の調査では、直接的な差別体験については、「とてもよくある」と「よくある」といった頻繁に差別を体験した者が1割弱であり、「少しはある」が3割弱、「ほとんどない」と「まったくない」が6割程度となっており、4割の者に被差別体験が「ある」となっている。今日においては、在日コリアンへのコリアンヘイト・スピーチが社会的な問題にもなっている。金・中村・阿久澤・山本(2015)が全国の朝鮮学校9校と民族系学校1校、コリア系国際学校1校の計1,379名の在日コリアンの中高生に行ったアンケート調査によれば、全体の87%の者がヘイト・スピーチを認知しており、特定の活動団体がある民族学校に対して行った街宣については74.7%の者が「怒り」を感じ、51.2%の者が「恐怖」を感じているという。

3.4 まとめ

ここまでの議論を踏まえ、今日の在日コリアン青年については、以下のとおりまとめられる。すなわち、今日の在日コリアン青年は、三世・四世以降の若者であり、その多くは韓国籍もしくは日本国籍の者で、朝鮮籍の者は1割程度である。彼らのうち、およそ7割は日本学校を出て、3割程度は、民族学校を出ている。また、およそ、6～7割の者は日本名を、2～3割の者が民族名を使用して生活しており、母国語能力については、およそ、3割の者が母国語をある程度使用できるが、7割の者は使用が困難である。社会生活環境について、一世・二世の頃と比較して、社会制度上の差別の多くは改

善されたものの、およそ4割の者は直接的な被差別体験を有している。

今日の在日コリアン青年の名前、言語、教育、生活環境など、目に見える部分(外的な部分)は日本人青年と変わらない部分が多い。その一方で、彼らが在日コリアンとして生きる上では、差別感情や被差別体験に直面し「怒り」や「恐怖」を感じるなど、目に見えない部分(内的な部分)については、日本人青年とは異なる独自の体験を有している。この目に見えない部分に着目していくことが、今日の在日コリアン青年の理解においては重要であると考えられる。

Ⅲ. 在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」

1. 在日コリアン青年の民族的アイデンティティに関する先行研究

今日の在日コリアン青年の境遇は民族性の希薄化としても捉えられ、冒頭で述べたとおり、社会学分野においては、彼らの民族的アイデンティティについて研究が行われてきた。例えば、福岡(1993)は、在日コリアン青年の語りから、民族的アイデンティティの様相に迫り、「祖国志向」、「同胞志向」、「共生志向」、「個人志向」、「帰化志向」の5類型を見出した。後に「葛藤型」と「葛藤回避型」を加えて「生き方の指向性7タイプ」としてまとめ、今日の在日コリアン青年の多様化を指摘している(福岡・金, 1997)。また、彼らが日本社会の中でいかに民族的アイデンティティを形成し、保持しているのかについて、多くの研究がなされている(福岡・辻山, 1988; 井出, 2000; 狩谷, 2000)。心理学の分野においても、中村他(1994)は、民族学校に通う中学生にとって、日本人との接触が、彼らの民族的アイデンティティにどのような影響を及ぼすのかについて検討しており、平他(1995)は、在日コリアン青年の「名前の使い分け」に着目し、彼らが対象や場面に応じて民族的アイデンティティの意識を強弱させる可能性について検討している。

民族的アイデンティティに関する研究の中では、在日コリアン青年が日本社会の中で差別に直面し、自身の民族的アイデンティティをめぐって不安を感じたり、葛藤に直面することが指摘されている（福岡，1993；福岡・金，1997；福岡・辻山，1988；中村他，1995；平他，1994）。精神科医である黒川（2006）は、在日コリアン一世・二世の精神疾患患者の事例研究を通じて、在日コリアンを取り巻く差別構造が、在日コリアンの民族的アイデンティティの形成に決定的な影響を及ぼし、これらの問題が在日コリアンの精神医学的な問題とも関連することを指摘している。同じく精神科医である金（2001）も、青年期のアイデンティティ形成において民族的劣等感の内在化や、それに伴う自己否定といった葛藤が生じ、場合によってはそれらが深刻な外傷体験となりうることを指摘している。黒川（2006）と金（2001）の知見は、一世・二世の精神疾患患者の事例から検討がなされたものであり、境遇が異なる三世・四世以降の者にどれほど当てはまるかは慎重に判断する必要がある。しかし、今日の在日コリアン青年もまた、民族的アイデンティティなど、在日コリアンであることにまつわる事柄について過度な不安や葛藤を抱えた場合に、精神医学的なリスクを抱える可能性を示唆する知見であると考えられる。

その一方で、尹（2016b）は、従来の民族的アイデンティティに関する研究の中で、在日コリアン青年が、不安や葛藤を抱えていることを指摘しているものの、彼らの不安や葛藤そのものについて考察が十分に行われていないことを指摘している。この点について、尹（2016b）は、先行研究を概観した上で、在日コリアン青年の対人関係の問題に着目した。そして、在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験に着目した一連の研究を行っている（尹，2016a，2018，2021a）

2. 在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」

2.1 「差異をめぐる葛藤」の定義

尹（2016a）は、在日コリアン青年の同世代の日本人との対人関係、同世代の在日コリアンとの対人関係に着目し、それぞれの関係における情緒的体験について検討を行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて在日コリアン青年の語りを分析した結果、相手が日本人の場合であっても、在日コリアン同士の場合であっても、共通して直面する葛藤のパターンを見出した。すなわち、在日コリアン青年はいずれの対人関係においても、相手との差異を認識すると、自身のこれまでの在日コリアンとしての体験や在日コリアンや朝鮮半島にまつわる様々な情報から、差異を望ましくないものと意味づけ、同時に相手の差異に対する反応を想定し、評価懸念、不安、疎外感、劣等感などネガティブな情緒が生じる。しかし、もう一方では在日コリアンであることを伝えたいなどの相反する情緒も同時に存在するため、相手との関係性にまつわる葛藤が生じる。この葛藤のパターンを、尹（2016a）は在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」として概念化した。

その後の研究において尹（2021b）は、特に出自の差異に着目し、「出自の差異をめぐる葛藤」について量的に検討を行うことを目的に「出自の差異をめぐる葛藤」尺度を作成している。「出自の差異をめぐる葛藤」尺度の作成において、評価懸念と相反する情緒について、相互理解欲求と捉えなおし、検討を行ったところ、「評価懸念」と「相互理解欲求」の二因子構造であることが見いだされ、「相互理解欲求」が高くても、必ずしも「評価懸念」が低いわけではないことが示唆された。この結果は、「出自の差異をめぐる葛藤」を、「評価懸念」と「相互理解欲求」の二側面から捉えていくことが有効であることを示唆している。

本稿では、在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」を、「在日コリアン青年が対人関係の中で、在日コリアンにまつわる事柄をめぐって、相手との間で差異に直面した時、差異を否

定的に意味づけ、評価懸念などのネガティブな情緒が生じる一方でそれと相反する相互理解欲求などの情緒も生じ、直面する葛藤」と定義する。

2.2 同年代の対人関係における「差異をめぐる葛藤」

「差異をめぐる葛藤」は彼らの同年代の対人関係においていかにあらわれるのであろうか。その例を、尹（2016a）が示した在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験のプロセスモデルとその考察から示す。まず、同世代の日本人との関係においては、例えば、自己紹介の場であったり、自身が在日コリアンであることをカミングアウトする際に、それまでの直接的あるいは間接的な被差別体験に由来する韓国・朝鮮・在日コリアンについての否定的な認識から、相手と異なる出自や祖国と在日コリアンに対する思いを否定的に意味づけ、関係悪化の不安や自身の印象・評価に対する不安が生じる。同時に、相手とより深い関係を築いていくために自身が在日コリアンであることを知ってもらいたい気持ちや相手に誠実でありたい気持ちも生じて、葛藤に直面するという。

一方、在日コリアン同士の間においては、交流の中で相手と出自が同じであるという安心感や親近感を抱いたり、在日コリアン同士の絆を実感したりする。しかし、そうした相手との間で、例えば、受けてきた教育環境の違いや民族性を重視する場の雰囲気への馴染めなさを感じると、自身がその場にふさわしくないなどの劣等感や他の参加者からの評価懸念が生じ、葛藤が生じるという。

このように、「差異をめぐる葛藤」は、日本人との関係、在日コリアン同士の間といった特定の対象に限定されることなく対人関係の中で生じることが示されている。

2.3 親子関係における「差異をめぐる葛藤」

在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験について、母文化継承をめぐる親子関係に

ついても検討がなされている（尹，2018）。一般在日外国人の家庭においては、親は子に母文化継承を望んでおり（川瀬・相良，2009）、自国の文化や言語を身につけてほしいと願っているという（佐野，1998）。しかし、在日コリアンの家庭においては、親が母文化継承を望んでいることもあれば、親が子の母文化継承について日本社会での適応に有利に働くことについて懐疑的であったり、慎重な意見を有していたりすることもある（金，2011）。

尹（2018）は、在日コリアン青年の親子間の母文化継承に関する語りを分析し、在日コリアンの親子間の母文化継承における子の体験について検討した。その結果の中で、例えば、子が民族名を名乗りたいと思っても、親が民族名を名乗ることに反対するなど、親子間で母文化継承の態度に差異がある場合に、子に自身の母文化継承に対する思いと親との関係の間で葛藤が生じることが示唆されている。また、たとえ、親子で母文化継承に対する態度が一致する場合であっても、母文化継承の活動の場が、親が参加していた民族団体と異なる場合に、子に葛藤が生じることがある。

親子の間で母文化継承に対する認識や参加する民族団体が異なる場合に、子は自身の母文化継承に対する思いと親との関係との間で葛藤に直面することから、尹（2018）は母文化継承をめぐる親子関係においても「差異をめぐる葛藤」が生じる可能性を指摘している。

2.4 心理臨床的支援における「差異をめぐる葛藤」

在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」について理解しておくことは、彼らへの心理的支援を検討する際にも重要であることが指摘されている（尹，2021a）。尹（2021a）は、在日コリアン青年への心理的支援として、サポート・グループ^{注2)}による支援を試み、その経過について考察を行っている。

尹（2021a）のグループに参加したメンバーは、3名の在日コリアン青年（以下、A、B、C）で

あり、全員が民族学校を卒業し、日本の大学に通いながら、民族団体の青年会に参加していた。グループの経過の中で、ある回、3名のうちAが遅れて入室してきた。BとCはそれまで、青年会活動は大事な活動ではあるものの、一方で活動の中で感じる負担感について語りあっていた。しかし、活動の先輩であるAがやってきた瞬間、BとCはそれまで話題にしていた青年会での負担感を口にするのを躊躇い、グループはなんとも言えない緊張感に包まれた。しかし、その後の回で、Aから青年会活動についての葛藤が語られ、その際に、Bは以前は語ることができなかった活動で感じている負担感を語る事ができた。この展開について尹（2021a）は、メンバー間に「差異をめぐる葛藤」が生じた可能性を指摘している。すなわち、BとCは自分たちが感じている青年会活動の負担感について、Aから批判を受けるのではと評価懸念が生じ、何も言うことができなかった。しかし、その後の回で、Aから青年会活動についての葛藤が語られたことで、Bの心の内でAからの評価懸念が和らぎ、自身が感じている負担感をAに話す事ができた可能性がある。そして、グループの場でメンバー間に「差異をめぐる葛藤」が生じることで、メンバーがありのままの情緒を語る事が難しくなると考察している。

2.5 まとめ

ここまで在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」について、同世代の日本人との関係、在

日コリアン同士の関係、親子関係、そして、サポート・グループに関する研究から論じた。それぞれの場面で生じるネガティブな情緒（評価懸念など）、それとは相反する情緒（相互理解欲求など）の例についてTable 1に示す。

先行研究における在日コリアン青年の語りにも、対人関係にまつわる語りが見受けられる。例えば、拒絶される怖さがあるため日本人の友人に在日コリアンであることを言えないという語り（福岡・辻山，1989）や、民族名を名乗る在日コリアンの友人を目の前に日本名を名乗ることを「引け目」に感じたという語り（狩谷，2000）がある。先行研究では、このような語りについて、彼らの民族的アイデンティティや彼らを取り巻く社会問題を中心に考察を行ってきた。また、在日コリアン青年の、日本人との関係、在日コリアン同士の関係は、別々に捉えられており、共通する情緒的体験について検討がなされることもなかった。

しかし、Table 1を見ると、いずれの相手・場面においてもネガティブな情緒（評価懸念など）には、相手との関係や関係性にまつわる情緒が示される。すなわち、「差異をめぐる葛藤」において重要な視点は、民族的アイデンティティや彼らを取り巻く社会環境の問題を踏まえた上で、彼らの葛藤は相手との関係性や関係形成にまつわるものであり、特定の対象に限定されることなく対人関係の中で反復的に生じる可能性があるという理解である。

Table 1 在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」の例

相手・場面	差異	ネガティブな情緒(評価懸念など)	相反する情緒(相互理解欲求など)
日本人との関係 (尹, 2016a)	<ul style="list-style-type: none"> ・在日コリアンであること ・祖国や在日コリアンに対する思い 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係悪化の不安 ・評価懸念 	<ul style="list-style-type: none"> ・知ってもらいたい ・相手に誠実でありたい
在日コリアンとの関係 (尹, 2016a)	<ul style="list-style-type: none"> ・受けてきた教育環境の違い ・民族性を重視する場の雰囲気への馴染めなさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・劣等感 ・評価懸念 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心感や親近感を感じる ・在日コリアン同士の絆を実感する
親子関係 (尹, 2018)	<ul style="list-style-type: none"> ・母文化継承に対する態度 ・所属する民族団体 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係悪化の不安 ・親への申し訳なさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・母文化継承や民族団体への参加を認めてもらいたい
サポート・グループ (尹, 2021a)	<ul style="list-style-type: none"> ・青年会活動への思い 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価懸念 	<ul style="list-style-type: none"> ・青年会活動へのありのままの思い

Ⅳ. 在日コリアン青年にとって「差異」が問題となる背景

ここまで在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」について論じた。彼らの対人関係において一体なぜ「差異」が問題となるのであろうか。その背景の一つに、例えば、先行研究で指摘されてきた差別などの社会問題が考えられる。すなわち、自身が在日コリアンであることを露わにすることで差別感情を向けられることや排除されることを恐れて、「差異」を露わにすることに葛藤が生じる可能性である。しかし、これだけでは同じ在日コリアン同士の関係や親子関係の中で生じる「差異をめぐる葛藤」について十分に説明することが難しい。そこで本稿では、「差異をめぐる葛藤」の背景について、今日の彼らの境遇と日本文化における対人コミュニケーションと「差異」と「恥」に関する観点から更に検討していくことにする。

1. 「隠れたマイノリティ」としての在日コリアン青年

もともと、在日コリアンは人種的にも日本人との違いがほとんどなく、一見しただけではマジョリティ（日本人）との区別がつかない「隠れたマイノリティ（Hidden Minority）」である。それに加えて、Ⅱ章で今日の在日コリアン青年の境遇についてまとめたとおり、今日の在日コリアン青年の場合、目に見える部分（外的な部分）で日本人青年と変わらない者が大半である。その一方で、目に見えない部分（内的な部分）については、日本人青年とは異なる独自の体験を有している。このことは、祖国生まれの一世あるいはその子である二世、そして、母国から渡日してきた外国人や人種的に異なる外国人と比較して、今日の在日コリアン青年は、相手と自身との間に生じる差異が表に現れにくいことを意味しているのではないだろうか。たとえ、民族名を名乗り、一見すると差異が露わになっている状況においても、自身が渡日してきた

ニューカマーでなく、日本で生まれ育った在日コリアンであることや、場合によってはなぜ民族名を名乗っているのか、日本国籍を取得せずに国籍を維持しているのかなど、「差異」について更なる説明が求められることもある。また、それとは逆に在日コリアンとして生きながら日本名を名乗る場合であっても、狩谷(2000)が指摘しているように、なぜ日本名を名乗るのかを、民族名を名乗っている在日コリアンに更に説明をしなければならないこともある。

以上のように、今日の在日コリアン青年の場合、一見しただけではわからない「差異」を露わにするかしないか、「差異」についてどのように説明するか、自身の判断と選択に委ねられることになる。このことが今日の在日コリアン青年において、「差異」が葛藤的なものとならざるをえない背景の一つとして考えられる。

2. 日本文化における対人コミュニケーションの特徴と「差異」をめぐる「恥」の情緒

在日コリアン青年は、日本に生まれ育った親のもとに生まれ、育っていることも忘れてはならない。そこで、日本文化における対人コミュニケーションの特徴と「差異」をめぐる「恥」の情緒の観点から考察を行う。

Meyer (2014) の多文化コミュニケーションに関する知見に示されるように、日本と欧米諸国では対人コミュニケーションにおける相手との意見や見解の相違について異なる認識を有している。例えば、アメリカをはじめとする欧米諸国では、相手との意見や見解の相違はポジティブに捉えられ、表立って対立することは問題ないことであり、対人関係にネガティブな影響を与えないものとして捉えられている（見解の相違における対立型）。これに対し、特に日本文化においては、欧米諸国と比較して相手との意見や見解の相違は調和を乱すものであり、表に出すことは好ましくなく、それらが露わになる場合には対人関係にネガティブな影響をもたらすものとして捉えられている（見解の相違における対立回避型）。日本文化においては、

コミュニケーション場面で相手との差異を露わにすることは対人関係そのものにネガティブな影響をもたらすものと捉えられていると言えよう。

このような日本文化の心性については、精神分析の分野でも指摘されている。日本文化においては、差異は恥として認識されやすいため、対人関係のなかでは差異を隠すことが美德とされ、それが急に露わになることは当事者にとっても相手にとっても外傷的な体験（幻滅）となりうる（北山, 2012）。北山（2018）によれば、差異が恥となる背景には、清明純白主義にもつながる汚れ／清浄のタブーの感覚があり、それゆえに少しの汚れも傷もないにこしたことはないといった傾向が強くなるためであるという。そして、汚れと感じられるものの中には二面性や二重性といった割り切れないものが含まれ、自身の二面性や二重性は当人にとって見難い（醜い）ものになるという。例えば、前述のサポート・グループの事例（尹, 2021a）において、BとCがAに語るができなかった情緒は、青年会活動が大切であると感じながらも、一方では負担を感じているという二重性であったと考えられる。

日本文化の心性が色濃く表れている物語の一つに異類婚姻譚である「夕鶴」の物語があげられる。「夕鶴」の物語においては、人間の姿をした鶴であるつうが自らの本当の姿を見られることを人間である与ひょうに禁止するが、やがて与ひょうが犯禁してしまう。正体が露わになってしまったつうは傷ついて恥じて飛び去り、与ひょうは呆然と立ち尽くして、二人の関係は破局を迎える。北山（2007）はこの物語の特に結末に着目し、日本文化の心性における「見るなの禁止」と「幻滅」について論じている。しかし、本稿においてはこの物語の冒頭に着目したい。つうは与ひょうの前にただ現れたのではない。「女房にしてくれ」と与ひょうの前に現れている。ここに、与ひょうと結ばれること、すなわち深い関係を築こうとしているつうの気持ちが見てとれる。しかし、人間の畏にか

かって苦しんだつうは、ありのままの鶴の姿では人間である与ひょうから受け入れてもらえないと認識し、そのために人間の姿で与ひょうの前に現れたのではないだろうか。ここにつうの差異をめぐる情緒が見出され、在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」のプロセスとの類似性が示唆される。「夕鶴」の物語の悲劇性は、恥じて去らねばならなくなった結末のみならず、深い関係を築くことを望むがゆえに相手との差異を覆い隠して関係を開始する冒頭部分に端を発している点にも着目しておく必要があるのではないだろうか。

このような対人コミュニケーションにおける日本文化の心性は、日本で生まれ育った今日の在日コリアン青年の心の内にも存在するのではないだろうか。そのために差異を露わにすることは、自己表明にとどまらず、彼らの対人関係にかかわる問題として捉えられているのではないだろうか。また、日本文化のコミュニケーションの特徴と日本文化の心性に関する精神分析の知見は、「差異をめぐる葛藤」は在日コリアン青年に特有のものというよりもむしろ日本文化を内在化して生きる者の誰しもが程度の差はあれど抱える問題であることが考えられる。今日の在日コリアン青年の場合、従来の研究で指摘される在日コリアンへの差別感情の問題など、彼らの歴史・社会・政治的な背景もあり、この問題が際立って生じるのではないだろうか。

3. 今後の課題

本稿では、在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」について、今日の在日コリアン青年の特徴について概観した上で、概念の整理を行い、「差異」が問題となる背景について、彼らの境遇と日本文化における対人コミュニケーションの特徴と「差異」をめぐる「恥」の情緒の観点から考察を行った。「差異をめぐる葛藤」は、従来指摘されてきた民族的アイデンティティの問題や社会的な問題を念頭に起きながら、在日コリアン青年の対人関係における問題を捉えていく視点であると言えよう。

今後の課題として、質的研究によって見いだされた「差異をめぐる葛藤」の概念を、量的に検討していくことがあげられる。また、発達の観点から、在日コリアン青年の対人関係に着

目して見いだされた「差異をめぐる葛藤」が、異なる年代の在日コリアンにおいてはどのような様相を呈しているのかについて検討することが今後の課題として考えられる。

付記

本稿は2021年度に提出した博士論文「在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験に関する研究——差異をめぐる葛藤について——」

の一部を加筆修正し、考察を加えたものである。本稿は科研費（「JSPS KAKENHI Grant Number JP 20K13704」）の助成を受け執筆した。

注

注1) 2015年12月の在留外国人統計から、「韓国・朝鮮」籍は、「韓国」籍と「朝鮮」籍に分けて計算されるようになったが、本稿では、「韓国」籍と「朝鮮」籍の数を合わせ、「韓国・朝鮮」籍とした。

注2) サポート・グループとは、「特定の悩みや障害を持つ人たちを対象に行われる小グループのことであり、専門家あるいは当事者以外の人びとによって開設・維持されるが、参加者の自主性・自発性が重視される相互援助グ

ループ」（高松，2009）である。サポート・グループの目的は、「仲間のサポートや専門家の助言を受けながら、参加者が抱えている問題と折り合いをつけながら生きていくこと」であり、グループの特徴としては、①「治そうとしない」、②「誰にも言えなかったことを話せる場としての機能」、③「ただ語ることに意味がある」ことがあげられる（高松，2009）。

引用文献

福岡安則（1993）. 在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ 中央公論社.

福岡安則・金 明秀（1997）. 在日韓国人青年の生活と意識 東京大学出版会.

福岡安則・辻山ゆき子（1988）. 同化と異化のはざままで（1）——在日韓国・朝鮮人三世のアイデンティティ—— 千葉県立衛生短期大学紀要, 7（2）, 69-80.

福岡安則・辻山ゆき子（1989）. 名乗ることへの恐れとその背後構造——同化と異化のはざままで（2）—— 千葉県立衛生短期大学紀要, 8（1）, 63-78.

法務省（各年版）. 在留外国人統計.

井出弘毅（2000）. 日本国籍コリアンのアイデンティティに関する考察——「出自」をめぐる語りから—— 東洋大学大学院紀要, 37, 39-54.

池田幸恭（2015a）. 大人からみた「青年」の諸相——研究委員会共同調査の結果にもとづく検討—— 青年心理学研究, 27（1）, 93-97.

池田幸恭（2015b）. 研究者がとらえる「青年」の問い直し——2013年度シンポジウムでの議論

を受けて—— 青年心理学研究, 26（2）, 189-192.

中央日報日本語版（2019）. 在日同胞の母国語教育、日本の「朝鮮学校」が存廃の危機に…10年間に生徒40%減 2019年12月31日.

姜 在彦・金 東勲（1994）. 在日韓国・朝鮮人歴史と展望 改訂版 労働経済社.

金原左門・石田玲子・小沢有作・梶村秀樹・田中宏・三橋 修（1986）. 日本のなかの韓国・朝鮮人、中国人—— 神奈川県内在住外国人実態調査より 明石書店.

狩谷あゆみ（2000）. 「在日である」／「在日をする」／「在日になる」——在日韓国朝鮮人の若者のアイデンティティについて—— 広島修大論集, 41（1）, 197-217.

川瀬洋子・相良順子（2009）. 在日韓国人の母親における異文化ストレスと関連要因の検討——ニューカマー（New Comer）の場合—— 児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要, 11, 19-26.

金 愛慶（2011）. 在日コリアンの韓国語・文化教育の意味：多文化共生・多文化教育の観点か

- ら 名古屋学院大学論集 社会学篇, 47 (4), 95-110.
- 金 泰泳 (2007). 在日コリアンと精神障害——ライフヒストリーと社会環境的要因—— 晃洋書房.
- 金 長壽 (2001). 在日コリアンのアイデンティティと精神障害——特に在日症候群について—— 日本バプテスト連盟・熊本「同化発言」差別事件に取り組む担当者会.
- 金 尚均・中村一成・阿久澤麻理子・山本崇記 (2015). 在日コリアンをめぐる社会問題に関するアンケート評価. 2015年度龍谷大学人権問題研究委員会助成研究プロジェクト報告書ヘイトスピーチによる被害実態調査と人間の尊厳の保障.
- 北山 修 (2007). 劇的な精神分析入門 みすず書房.
- 北山 修 (2012). 幻滅論 (増補版) みすず書房.
- 北山 修 (2018). 新版心の消化と排出 文字通りの体験が比喩になる過程 作品社.
- コリアNGOセンター (2021). 活動テーマ <https://korea-ngo.org/about/theme> (2021年6月30日)
- 黒川洋治 (2006). 在日朝鮮・韓国人と日本の精神医療 批評社.
- Meyer, E. (2014). *The Culture Map*. (メイヤー E. 田岡 恵 (監訳) 樋口武志 (訳) (2015). 異文化理解力 英治出版.)
- 水野直樹・文 京洙 (2015). 在日朝鮮人——歴史と現在—— 岩波書店.
- 中村 真 (1999). 日本人の人種・民族ステレオタイプと偏見 岡 隆 (編) 現代のエスプリ 384 偏見とステレオタイプの心理学 (pp. 87-98) 至文堂.
- 中村俊哉・慎 栄根・平 直樹・川本ひとみ・横山恭子・高田夏子 (1994). 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験 教育心理学研究, 42 (3), 291-297.
- 朴 三石 (2009). 在日朝鮮人学校教育の現状と課題. アジア教育研究, 2 (1), 57-66.
- 梁 陽日 (2010). 在日韓国・朝鮮人のアイデンティティと多文化共生教育——民族学級卒業生のナラティブ分析から—— *Core ethics*, 6, 473-483.
- 産経新聞 (2019). 朝鮮学校生徒減少の背景に少子化 帰化・国際結婚で深刻に 2019年12月30日.
- 佐野秀樹 (1998). 異文化ファミリーのカウンセリング 井上孝代 (編) 現代のエスプリ 377 多文化時代のカウンセリング (pp. 156-164) 至文堂.
- 宋 基燦 (2001). 在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開 京都社会学年報, 9, 237-253.
- 高松 里 (2009). サポート・グループとは何か? 高松 里 (編) サポート・グループの実践と展開 (pp. 15-30) 金剛出版.
- 平 直樹・川本ひとみ・慎 栄根・中村俊哉 (1995). 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて 教育心理学研究, 43 (4), 380-391.
- 田中 宏 (2013). 在日外国人——法の壁, 心の溝—— 第三版. 岩波新書.
- 田中 宏 (2015). 高校無償化からの朝鮮高校除外, その前後左右 歴史学研究, 935, 18-28.
- 谷 富夫 (1995). 在日韓国・朝鮮人社会の現在 地域社会に焦点を当てて. 駒井 洋 (編). 定住化する外国人 (pp. 133-161) 明石書店.
- 都筑 学 (2013). 青年期の始まりと終わりをとらえる——研究委員会共同調査データにもとづく検討—— 青年心理学研究, 24 (2), 229-233.
- 曹 慶鎬 (2013). 在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究——日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に—— 多言語文化——実践と研究, 5, 100-120.
- 尹 成秀 (2016a). 在日コリアン青年の対人関係における体験——グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた在日コリアン青年の語りの分析—— 教育心理学研究, 63 (4), 492-504.
- 尹 成秀 (2016b). 我が国における在日コリアンに関する研究の動向——在日コリアン青年の臨床心理学的課題を考えるために—— 九州大学心理学研究, 17, 87-97.
- 尹 成秀 (2018). 今日の在日コリアン子弟の母文化継承に関する一考察——親子関係に着目して—— *こころと文化*, 17 (2), 158-167.
- 尹 成秀 (2021a). 在日コリアン青年の民族性をめぐる割れ切れない情緒について——サポート・グループの試みをとおして—— 人間性心理学研究, 38 (2), 187-198.
- 尹 成秀 (2021b). 在日コリアン青年の出自の差異をめぐる葛藤尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 63, 353.

Abstract

Conflicts Caused by Differences in Zainichi Korean Adolescents and the Background of Conflicts

Yun Seongsu

This article examined “conflicts caused by differences” in interpersonal relationships of Zainichi Korean adolescents and discusses the background of these conflicts, focusing on why “differences” are a problem for Zainichi Korean adolescents. Firstly, we defined “Zainichi Korean (Korean residents in Japan)” and described their population, the generations, education, names, the mother tongue, and the social life of Zainichi Korean adolescents. Next, we categorized and discussed the concept of “conflicts caused by differences” in their interpersonal relationships. Finally, we have discussed why “differences” are problems for Zainichi Korean adolescents from the perspective of their current circumstances, communication in Japanese culture, and the feeling of “shame” related to “differences”.

Keywords: Zainichi Korean (Korean residents in Japan), Zainichi Korean adolescents, Interpersonal relationships, Conflicts caused by differences, Shame